特集 救急医と，COVID-19と

周知のことではありますが，新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は，丸３年を超える長いトンネルを抜け，2023年５月８日から「５類感染症」となりました。

“with コロナの時代”の始まりであった2020年には，２月にダイヤモンド・プリンセス号内での集団感染が発生，同年３月に WHO が「パンデミック」を宣言し，４月には日本でも「緊急事態宣言」が発令され，全国的に外出自粛が求められました。さらに，このような状況で東京オリンピック・パラリンピック2020は開催延期となり，翌2021年７月に感染拡大防止のため無観客での開催となりました。

それ以降，今現在まで続くコロナ禍において救急医は，変異するウイルスに対峙しながら，パンデミックの大波を幾度となく乗り越え，“社会のセーフティネット”としての救急医療を最前線で死守してきました。平時からの救急患者に対する診療・治療に加え，救急医が直面し主体的に関与してきたであろうことを思い浮かべてみると，「発熱外来対応」「激増する搬送困難事例への対応」「クラスター対応」「濃厚接触者対応」「ワクチン接種対応」「医療従事者の欠勤への対応」「PCR 検査」「ECMO の活用」など山積みであり，また，そのなかで培われた「医療体制の整備」「感染症対策・感染制御」「医療従事者の負担軽減策」など，後世に伝えるべきことも多岐にわたります。このように，コロナ禍の約４年間は，救急医が救急医たる所以を，またその存在意義を，救急医自身も社会も，それぞれに感じた/感じさせられた期間でした。

５類感染症への移行は COVID-19パンデミックの一つの区切り（収束）といえますが，真の終息にはまだ時間がかかるでしょう。今後も，救急医が現場で感じ，考え，実践してきた知見や経験をもとに，よりよい医療体制を整備していくことが求められます。だからこそ今，コロナ禍において救急医は何をしてきたのか，できたのか，あるいはできなかったのかを改めて振り返るべきタイミングであると考え，本特集を企画しました。

本特集の核は，「診療・治療」「パンデミック対応」「勤務体制・環境」「教育・研修」「病院・部門経営」「情報発信」「国際活動」「終末期医療」という８つのテーマに沿った対談・座談会です。関連寄稿も含めて，コロナ禍で悩み，耐え，もがき苦しんできた，そして一筋の光が差しはじめたような“いま”を実感している，救急医の“生の言葉”を集めました。その共有が，コロナ禍の救急医療を振り返り，そして将来を考える，あるいは仲間と語り合う，貴重なきっかけとなることを期待しています。

特集企画ゲストエディター：慶應義塾大学医学部救急医学　佐々木淳一